

横浜貿易新報、昭和17年、18年に興味深い記事がありました。

金田村では、『昭和15年、農林省より全国に初めての農村電化のモデル村に指定されるに及び、機械化農業経営に拍車がかげられ、現在の畜力化、機械化農村としての金田村の素地が形作られていった』（昭和25年金田村村政要覧）

金田村は、農村電化のモデル村にという国策に基づき「農作業に電力を導入する」ことが、神奈川県はもとより、全国の府県に先駆け実施されました。

神奈川県でのこの事業は、農村の「労力、畜力、燃料不足を克服すべく」実施されたとあります。世界規模の戦争へ大きく舵を切った時代です。農村から兵士として出征、軍馬の供出、石油は最重要な軍事力として利用された時代です。農業生産性を減退させないために、農作業の電化が進められ、金田村がその先駆けとなった記事です。

農村革新として電化作業に着手 中郡金田村で 18日施設竣工式挙行

(昭和17年11月17日)

増産と労力節約の二つの点を担った農村電化について、中郡金田村では田中村長、吉川農業組合長が中心となり、過般□□□□を進めていたが、施設が整備されたので、十八日午前十時から国民学校で竣工式を挙行し、脱穀作業から開始することになった。

続いて、二毛作水田の種播き準備の耕耘作業をも行うことになった。この結果によっては付近各村にも、電化施設が行われるものと見られている。

* 金田村国民学校を会場に電気を動力として、米の脱穀作業を試験的に実施する記事です。事業は、村長、農業組合長をはじめ全村挙げて行われました。

金田地区の農業用地は、水田の暗渠事業が完成し、冬季の水田の畑地化が進み、水田を畑地とする二毛作が実現した時期と重なります。

成績良好であった金田村の電化実験 きょうから実際作業に

(昭和17年11月19日)

時局の要求によって出発した農村電化が、全県に率先して、中郡金田村で実行期に入り、18日午前10時から金田国民学校で、県保安課鈴木技師、県農産課森技師、□東□電神奈川支店長岩佐剛一氏、その他□電力関係者多数出席、電化の第一回竣工式を挙行した。田中村長の挨拶、鈴木森技師、岩佐支店長の祝辞等があつて、農耕地で脱穀耕耘の実演を行ったが、結果は頗る良好なので、愈々十九日から農家が実際作業を開始することになった。

電化による脱穀は一反歩1時間30分で終わり、これに要する電力料は僅かに1キロ

12銭で足り、又種播き前の耕耘整地作業は1日五反歩の能率が上がり、一反歩の電力は2キロ乃至3キロで、廿四銭乃至三十六銭で足りる。同村の成績の結果、農村に適用される。

* 電力は、工業生産にとって重要な資源です。『第一次大戦後、日本は重化学工業化が進み、水力発電所の建設を促進させ、農村地帯にも電気が普及した』との指摘もあります。

農村への電力資源の普及は、モーターを動力源とする農業機械の発達と農作業への利用が進められました。

記事で紹介されるように、農作業への電力利用は、不足する労働力を補填し、農作業のスピード化、コストの削減、結果的に農業産物の増産をもたらすと判断されました。農村の電化策は、実験段階を終え金田地区への導入が決まりました。

全村挙げて節電を実施する 農村電化の金田村

(昭和18年1月30日)

増産と労力節約を目指し、全国に魁けて昨秋農村電化を実施した中郡金田村では、廿八日村常会を開催、東京通信局湯尾電波部長、同保安課鈴木技師、関東口電幹部を招致して節電につき懇談、左記(下記)申合せを行った。

- △ 二月一日より全村配電一元化し昼夜送電をなすこと
- △ 二月は各自点灯を午後五時半消灯を午前六時となすこと
- △ 毎月村常会に於て点灯及び消灯を決定すること
- △ 必要以外の電灯の消灯及就寝時の消灯を厳守すること
- △ 月夜には街灯も消灯すること

* 農作業を電化することがいかに効率的であっても、電力の利用には、節電という形で答えねばなりません。農家の点灯時間が定められ、明るい夜は街灯が消されました。

また、貿易新報には、昭和17年「畜力による中耕除草地区、金田村を指定」、「馬耕除草講習会・金田村耕地」とあります。(わたくしたちの住むまち金田)
農作業に電力が取り入れられても、畜力利用と並行して行われていました。

労力不足の農村へ助け船の電化計画 十倍の能率絶対確保

(昭和18年10月9日)

県下の労力、畜力、燃料不足を克服すべく、凡ゆる万策を巡らせつつある、県食糧増産指導本部では、これが完璧を期すべく「決戦農村電化策」を確立することとなった。

即ち従来人力、畜力、燃料によって耕耘、灌漑、穀類調整、誘蛾灯等を電化に切替へて農事作業の合理化を図るべく、八日、県庁に口東配電支社及び各関係者を招致して、口電化促進協議会を開催、打ち合わせを行った結果、政府の農村電化指導要綱に基づき、

電力耕耘機の利用強化、石油発動機による各種作業の電力化を可及的速かに実行することに決定、これと同時に昼夜配電の一元化を口東配電に要望した。

現在、農家への配電線は昼夜線と夜間線の二種であるが、これを昼夜線に一元化することによって、電口機の共同利用率が増大され、生産能率も画期的増強を見るというにあるが、過般、口口中郡金田村の電化による耕耘作業を試験的に行ったところ、その結果、従来の人力、畜力に比し十倍の能率をあげ、しかも費用は三分の一で足りたという驚異的成果を納めた。

これによって見ても、農村地帯に昼夜線の実現は期して待つべきものがある。なほ、現在県下の耕作不能地耕作不十分なる地積及農機具の電化可能量は次の如くである・・・

- * 「中郡金田村の電化による耕耘作業を試験的に行ったところ、その結果、従来の人力、畜力に比し十倍の能率をあげ、しかも費用は三分の一で足りたという驚異的成果を納めた」。金田村での農村電化は予期以上の成果を挙げました。「驚異的成果」と表現されています。成功を収めた農村電化策は、金田地区から他府県に拡大され、実施に移されたと思われます。

水田の電化耕作 牛馬耕の五倍の好成績

(昭和18年11月14日)

麦類の割当増産をはかって、中郡金目村では水田の電化耕作を開始した。電化作業によると一日で一町歩の耕作が出来上がる。牛馬耕だと一日二反歩が関の山だ。

隣村の金田村では、昨秋から本格的電化作業を開始しているが、今年も口口日頃から裏作田の耕耘を行っているが、素晴らしい成績を示し稲の脱穀にも利用される。

- * 金目地区での電化実績、金田地区で電力を導入した耕地の耕耘、脱穀作業など成果が確実なものとなっている様子が記されています。

電力で稲の脱穀作業 科学と食糧増産の一石二鳥 中郡金田村国民学校児童

(昭和18年11月16日)

電化村で有名な中郡金田村国民学校では、児童達が学校口口農場口水田の用排水溝で稲を栽培して、其の実る口刈りにつつて電化によって校庭の学童の手によって脱穀作業を行っている。学校農場からは十三俵、溝から廿五俵位が増産される。この事業は四年前から実施しているので、数百円の基金が出来ているので十力年計画で村民錬成道場を建設する計画である。学童たちが電化により脱穀、耕耘等を実施することは、科学する学童たちを科学方面に伸ばすことに大きな力となる。

- * 金田村は「電化村で有名」。米の収穫量は、学校農場から13俵、農耕地以外の溝(溝植え)からの収穫が25俵と生産されました。児童による農作業からの収入を「村民錬成道場」の基金に組み入れることも記されています。学校の児童が、電化された農

業に励むことが、科学方面の学習効果を挙げるといふ、副次的な効果も生んでいる。

「村民錬成道場」の詳細は資料がありませんので、内容は不明です。

当時の児童はよく働きました。戦時中、学校は農園を持ち、そのうえ、水田以外の溝を利用しての耕作がおこなわれていました。これを「溝植え（みぞうえ）」と呼んでいました。金目川の小高い河川敷には、「報国農場」という農地を持ち、主にサツマイモが栽培されていました。これらの農場は児童たちによって、栽培や収穫作業が実施されていました。

- 金田村の「農村電化」は、モデル村に指定され、記した通り、昭和 17、18 年になり小学校を舞台にして、脱穀の模範が実施されたと報道されました。

農作業を電化する主力は、耕耘機や脱穀作業への導入でした。

一方、貿易新報には、昭和 17 年「畜力による中耕除草地区、金田村を指定」、「馬耕除草講習会・金田村耕地」とあります。同じく金田村を舞台に「畜力利用の高度化、県下馬耕競技大会」等の実施が報道されています。牛馬は農作業の主力でした。

畜力としては、「鮮牛」と呼ばれた朝鮮由来のメス牛が多用されました。オス牛とは異なり、優しい性格で女性や子供も手綱を引くことができたそうです。

金田村の農業は、軍馬として徴用された馬に代わって、牛が重用されました。男性の労働力を補うためのことでした。

金田地区の農作業は、村政要覧で紹介した通り、従来通りの牛馬を使用する畜力と新たに導入された電力が利用されました。しかし、「金田の歴史再発見事業」を推進する過程で、農家の方々の体験をお聞きした際、農作業に電力を導入したことを強い思い出として、お話を聞くことはあまりありませんでした。脱穀に電力が使われたのは一部の農家で、水田や畑地を耕耘し農産物の運搬などには、依然として畜力が主流だったと考えられます。

「農村電化即農作業の近代化」ではなかったようです。